



## 関西大学独逸文学会研究発表概要（第101回研究発表会）

著者	? 由依, 齊藤 公輔, 嶋田 宏司, Wittkamp Robert F.
雑誌名	独逸文學
巻	53
ページ	99-102
発行年	2009-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/1039">http://hdl.handle.net/10112/1039</a>

## 関西大学独逸文学会研究発表概要 (第101回研究発表会)

### 1. 慰め行為の日独対照研究

—円滑な人間関係構築のために—

濱 由依

#### (1) 研究目的

言語運用能力がいくら優れていても、言語文化の知識に精通していなければうまくコミュニケーションができるとは限らない。それゆえ、外国語学習者は目標言語の知識だけでなく、それぞれの言語文化に即した表現方法を学ぶことも必要である。本研究では、「慰め」行為に注目し、日本人とドイツ人の性差に焦点を当て、言語的特徴を実証的に検証した。

#### (2) 研究方法

言語的特徴を明確に記すため、DCT (Discourse Completion Test) という質問紙形式を用い、日本とドイツで質問紙調査を行った。調査対象は、20代の日本人とドイツ人の大学生で、それぞれ日本語あるいはドイツ語が母語話者の学生のみを対象とした。回答者数は、関西の日本人大学生(男性51名、女性75名)、ゲッティンゲンのドイツ人大学生(男性47名、女性62名)である。ここから得られたデータを、日本語とドイツ語それぞれの性差、深刻度別に分析し、「慰め」行為に深く関連する社会心理学的視点を交えながら考察を行った。

#### (3) 結果

本研究における一連の調査によって明らかになったことは、慰め行為のストラテジーが合計9個のカテゴリーに基づいているということである(共感する、質問する、助けを申し出る、助言・忠告をする、励ます、コメントする、周囲に目を向けさせる、冗談にする、複合的にストラテジーを使用する)。また、日本人、ドイツ人ともにストラテジーの選択には、性別または深刻度の影響を受けていることが明らかになった。しかしどちらの影響を受けるかは、ストラテジーや言語によって異なることも確認された。高い割合で使用されるストラテジーは、日本語とドイ

ツ語で大きな差は見られないが、それぞれ表現の仕方が言語固有の特性を備えており、同じストラテジーでもその違いが言語によって顕著に表れていた。比較的よく使用されるストラテジーは、その選択が日本語とドイツ語では部分的に異なり、それぞれ性別によって特徴的なストラテジーが使用されていた。

この質問紙調査は大学生を対象に行ったものであり、ここから日本とドイツ全体の使用実態を把握できないが、「慰め」行為の使用方法の一端、そして、日本およびドイツにおける傾向を示しているのではないかと思われる。今後、大学生に限らず、他の年齢層や地域性についても、さらに広く調査を行い、「慰め」行為の相違に注目していきたいと思う。

## 2. 『ヒトラー—最期の12日間—』の意義

齊藤 公輔

『ヒトラー—最期の12日間—』におけるヒトラー描写をめぐり大きな論争が巻き起こった。この評価の二重化について集合的記憶論の視点から捉えなおし、映画がもつ意義について考察する。

新聞と雑誌において『ヒトラー』は、一方では脱悪魔化されたヒトラー描写を「もっとも成功したドイツ映画の一つ」と評価しているのに対し、他方では海外メディアの辛辣な評価を掲載する否定的な報道がなされている。こうした評価の二重化は、世代の変化に伴い歴史への関心も移行していることを示している。つまりナチスの罪を描くか、それとも当時の体験を描くかという新しい時代が到来したといえる。

このことは、映画『ショアー』と『ヒトラー』における証言を比較すれば明らかである。『ショアー』は被害者側に立った証言が採用されているのに対し、『ヒトラー』は明らかに被害者側に立っていない証言によって成り立っている。

『ヒトラー』には、集合的記憶論のメディアからみた場合に従来のヒトラー映画にはなかった点が含まれている。『ヒトラー』はアカデミー賞ノミネートなどの輝かしい成績を収めている。また日本を含め世界各国で上映されたうえ、DVDなどの関連商品が多く流通している。これは新しいナチス描写の時代が世界中で消費されたことに他ならない。こ

れが従来のヒトラー映画・ナチス映画と一線を画するもう一つのポイントであるといえる。

『ヒトラー』は歴史関心が移行していることを銀幕に現わしたとともに、その移ろいを世界中で体験することを可能とした映画であると評価できる。

### 3. クルト・シュヴィッターズのナンセンス素描におけるマルク・シャガールの影響について

嶋田 宏司

クルト・シュヴィッターズが1919年から20年にかけて制作した40数点の水彩画および素描群は、酒瓶の中に人がいたり、豚が酒を瓶の中に吐いていたり、コーヒー・ミルの底に人の首が付いていたり、ナンセンスなダダ的内容を主題にしている。また、技法の点で、コラージュや印字スタンプによる描画が併用されていて、同時期に併行して制作されているメルツ絵画のコラージュおよびアッサンプラージュを主とする技法との共通点も見出しうる。

これらの素描群については、従来からマルク・シャガールの影響が指摘されてきた。今回の発表では、新たに発見されたシャガール作品からのモチーフの引用を報告し、シュヴィッターズ作品におけるシャガールの重要性を強調することにつとめた。そこで問題はモチーフの引用関係にとどまらず、画面構成法においてもシャガール作品がシュヴィッターズに影響を与えていることを指摘した。

この素描群の直前までの時期に描かれた風景素描や絵画を観察すると、地面の湾曲や屈曲という空間の不安定化の傾向を見出すことができる。その後のヘルヴァルト・ヴァルデンやデア・シュトルム誌を通じたシャガール作品との出会いは、その直前期作品における固定的な単一視点からの描写をシュヴィッターズに放棄させ、距離的にも、また意味的にも互いかけ離れた、日常世界の多様な断片イメージを多視点的に捉えて、ほしいままに画面に詰め込む、新たな画面方式への転換を促したといえる。

シュヴィッターズの主要な制作ジャンルであるメルツ絵画では、雑多な素材を生のまま取り入れるため、表面効果や彫塑的な表現までが制作技法の目的に含まれる。したがって、この素描群の問題はメルツ制作の

すべてに関わるわけではないが、幾何学的な形式の合間に写真や印刷物のイメージを挿入するメルツの方式に影響を及ぼしていることはたしかであり、この制作方式はメルツ作品の構成を決定する基礎にあたる。

#### 4. Wo ist das „Innen“ beim kollektiven Gedächtnis

Robert F. Wittkamp

Während meines einjährigen Forschungsaufenthaltes in Deutschland setzte ich mich intensiv mit der deutschsprachigen Gedächtnisforschung auseinander. Dabei stieß ich wiederholt auf ein Problem, das ich in meinem Vortrag zwar nicht lösen, aber zur Diskussion stellen konnte.

Bei der Betonung der Medien als materieller Ort des kollektiven Gedächtnisses fällt die Vorstellung auf, dass das kollektive Gedächtnis dorthin „externalisiert“ bzw. „exteriorisiert“, d.h. ausgelagert wird. Wie viele Metaphern der Gedächtnisforschung stammen auch diese Begriffe aus der Individualpsychologie, wo sie auch keine weiteren Schwierigkeiten bereiten. Anders ist es jedoch bei der Übertragung auf die kollektive oder soziale Ebene. Dass kollektives Gedächtnis durch die Medien getragen und vermittelt wird, ist allgemein bekannt. Aber woher kommt es? Wo ist das Innen des kollektiven Gedächtnisses?

An konkreten Beispielen aus der repräsentativen Literatur wurde gezeigt, dass die Forschung diese Frage normalerweise ausblendet. Hierfür verantwortlich ist vermutlich die Tatsache, dass die Antwort auf diese Frage eigentlich als viel zu selbstverständlich verstanden wird. Es ist vermutlich ein Beispiel für das, was Wolfgang Iser das „stumme Wissen“ nennt. Wie bei der Ritualforschung das Ritual ist auch das kollektive Gedächtnis ein „Konstrukt der Forschung“. Der in diesem Vortrag angedachte Lösungsvorschlag schloss an die Systemtheorie von Niklas Luhmann an. Die Kommunikation ist dann nicht nur Träger und Vermittler des kollektiven Gedächtnisses, sondern überhaupt erst der Ort der Entstehung. Denn das kollektive Gedächtnis ist, wie bereits Maurice Halbwachs feststellt, keine Summe von individuellen Gedächtnissen. Es gilt somit, die „Auslagerungsmetaphorik“ zu überdenken.